

「アラビア語教育と帰属意識」

日本学術振興会特別研究員 PD (桜美林大学)

平寛多朗

本発表ではチュニジアの中等教育で使用された「アラビア語」教科書を取り上げ、エジプトの事例と比較しつつ、アラブへの帰属意識とその文化的遺産の関係について報告した。

現在アラブ諸国と呼ばれる国では、アラビア語は公用語あるいは国家の言語であると憲法に明記され、国語として教育機関で教えられてきた。またアラビア語は単に国内の共通語として機能してきただけでなく、アラブ諸国における帰属意識の形成にも大きく関わってきた。

例えばエジプトでは、「過去、現在におけるアラブの民族意識、ウルーバの栄光に対する生徒の誇りを増大させ」、「様々な時代におけるアラビア語文学の遺産に生徒を結びつける」ことが、「アラビア語」の授業の目的であると 1961 年度の教育カリキュラムに明記されている。その「アラビア語」教科書の構成は「ジャーヒリーヤ時代」、「預言者・正統カリフの時代」、「ウマイヤ朝時代」、「アッバース朝時代」、「アンダルス」、そして「近代」に現れた詩、散文を時系列に沿って学ぶものとなっており、1930 年代から 1980 年代まで基本的に変わることはなかった。つまり時代に関係なく、エジプトの「アラビア語」という授業はアラビア語という言語を学ぶのと同時に、生徒をアラブ人の歴史、その中で現れたアラビア語の文化的遺産と結びつける役割を果たしてきたといえる。

このようなエジプトの事例からは、いくつかの疑問が生じる。その一つが、エジプトの「アラビア語」教科書で扱われる古典はエジプト以外のアラブ諸国でも共有されているのだろうか、というものである。古典に注目しエジプトの「アラビア語」教科書を追っていくと、特定の詩人や知識人の作品が変わることなく収録されていることに気が付く。それらの詩人や知識人は、学ばれるべき文化的遺産としてエジプトでみなされてきたといえる。かつてアラブ民族主義の思想家として知られるサーティウ・フスリーは、「アラブ人」を「アラビア語を話し、アラブに帰属意識を持つ者」と定義した。そしてアラビア語およびその文化的遺産はアラブ人の重要な紐帯であると述べた。エジプトで学ばれてきた文化的遺産がエジプト以外のアラブ諸国でも同じように学校教育で学ばれてきたのなら、それはアラブ域内で広く共有されてきた文化的遺産であり、アラブ人同士を結び付ける重要な紐帯として機能してきたといえるであろう。

そのような観点から、本発表では主にチュニジアの中等教育で使用された 1978 年度「アラビア語」教科書を取り上げた。チュニジアは 1956 年にフランスから独立して以降、アラビア語を国家の言語と定め、憲法に「チュニジアはアラブ・マグリブの一部である」と明記してきた。言い換えれば、独立以降アラブへの帰属を明確に示してきた国である。

チュニジアの 1978 年度「アラビア語」教科書は、「文学」と「エッセイ」で構成されてい

る。「エッセイ」には当時大統領であったブルギバや、ブルギバ時代に首相として活躍したムザーリーによるものが多数含まれている。例えば「ブルギバ主義の目的」、「若者の責任」、「理想的な市民」、「私たちの独立の意味」といったエッセイが彼らのものとして教科書に収録されている。また「エッセイ」には、ブルギバの政治的方針に沿うような形で、科学的な思考を扱うエッセイや近現代におけるイスラム法のあり方を模索するものも多数収録されている。「アラビア語」教科書が単に言語を学ぶためのものではなく、ブルギバの求めるような国家のあり方を生徒に理解させる側面があったことがうかがえる。「文学」に関しては、時系列に沿って学ばれるような構成となっていないが、古典が収録作品の約3分の1を占めており学習の中心となっていることが分かる。構成は異なるものの、エジプトの「アラビア語」教科書同様、チュニジアの教科書もアラビア語の学習を通してその文化的遺産と生徒を結び付けようとしている。

しかし学ばれるべき文化的遺産に関しては、エジプトのそれとは違いが見られる。その顕著な例が、中等教育の7年生の教科書に収録されたアブー・ハイヤーン・アル＝タウヒーディーとイフワーン・アル＝サファーであろう。タウヒーディーはブワイフ朝の時代に活躍した知識人であり、イフワーン・アル＝サファーはタウヒーディーと同時代に活動していた団体で、カルマト派との結びつきが指摘されている。1978年度の7年生の教科書は「文学」を中心にして構成され、古典、近代の散文にそれぞれ3つの章が充てられている。そして古典の3つの章のうち2つの章がタウヒーディーとイフワーン・アル＝サファーの散文となっている。タウヒーディーとイフワーン・アル＝サファーは1989年度の7年生の「アラビア語」教科書でもそれぞれ1つの章が充てられ、タウヒーディーに関しては2019年度のチュニジアの「アラビア語」教科書においても紙幅を割いて扱われている。チュニジアの「アラビア語」教科書では、タウヒーディーおよびイフワーン・アル＝サファーの散文が重要なアラブの文化的遺産とみなされていることが分かる。一方、エジプトの「アラビア語」教科書では、それらが重要なものとしてみなされることはなく、実際1930年代から1980年代の期間でイフワーン・アル＝サファーが扱われたことはない。タウヒーディーに関しては1973年度から1989年度の教科書で扱われているが、極めて簡単に言及されるだけである。

このような違いが生じているのは、国内の政治的状况によって「アラビア語」教科書における学ぶべき「文化的遺産」が変化するめだと考えられる。既に確認したように、チュニジアの「アラビア語」教科書には国家的イデオロギーが反映されている。教科書では、哲学の観点から宗教を理解しようとした人物、団体としてタウヒーディーとイフワーン・アル＝サファーに焦点が当てられており、そのような点が教科書を通して示そうとする国家のあり方に適していたのだと思われる。以上のことをまとめると、エジプト以外の地域でもアラビア語の文化的遺産はアラブへの帰属意識を形成する役割を教育の分野で担ってきたが、しかしその「文化的遺産」は各国によって異なるため、アラブ人の中でその文化に対する理解には違いが生じていると考えられる。

発表後、コメンテーターの先生方から教科書に関する貴重なご意見を頂いた。桜井啓子先

発表サマリー

生からは、国家的イデオロギーが反映される場である教科書というメディアから離れた場合、どのような現象が確認できるのかを押さえる必要があるとのコメントを頂いた。確かに、学校教育以外の場で、どのように文学の歴史が構成され、何がその中で学ぶべきものとされてきたのか、そしてそれは教科書とどのような違いがあるのかを確認することは重要であると思われた。

渡邊祥子先生からは、チュニジアの教育制度を形成した社会的、思想的背景の中で教科書の内容を捉えるべきであるというコメントを頂いた。さらに「アラビア語」教科書だけでなく、「哲学」、「イスラム」といった科目を分析する必要があることも指摘された。渡邊先生が指摘されるような、チュニジアにおける中等教育の全体を見た上で、その中における「アラビア語」の役割を捉えようとする視点はとても重要なものであると感じた。

今回の発表は、これまでの研究をまとめるいい機会となった。また両先生方から頂戴したコメントは今後の研究に活かしていきたいと思う。